

歴史の断層に育つて

東京都 田中清一

信州高遠の寒さは厳しい。東の仙丈岳、西に駒ヶ岳と年中雪を頂く山がそびえ、三峯川の流れは清く澄んでいて、四季を通じて美しく静かな町だ。

私は昭和十五（一九四〇）年の春、高遠小学校に入学した。思い返せばその二、三年前から世の中が騒々しくなったように思う。中国大陸で戦火が拡大して、あちこちに召集令状がきた。

先生に引率されて町外れで日の丸の小旗を振り、「バンザイ！バンザイ！」と出征兵士を見送った。ある日、先生から「英霊が帰られる」と言われ、出征兵士を見送った所まで行った。カーキ色の軍服を着た在郷軍人の小父さんが腕に黒色の布を巻き、胸に白い布で覆った小さな箱を抱えて車から降りて来た。それまで子供の私は、英霊という言葉の意味を知らなかった。ラツパが悲しみの

曲を奏でた。

そのころには、もう大好物の高遠饅頭が自由に食べられなくなっていた。

我が家では、祖父と母が守っていた豆腐屋が食糧統制で商売ができなくなった。半商半農の商いができなくなり、父が兵隊から帰って来たが生活の不安は募っていた。

そのころ町役場から係の小父さんが、幾晩も幾晩も満州行きの勧誘に訪れた。農地の少ない長野県では、食糧増産のため満州での開拓話が盛んに進められた。親戚の中には反対する人もいたが、これから先の生活のことも考えて渡満を決めたと思う。

父が訓練所生活を終わってから、一人満州に渡った。そこでの生活体験と、家族を受け入れるための準備があったと思う。昭和十九年、晩秋、他家の二所帯と、我が家族の生まれたばかりの弟を加えて五人は、高遠駅から夜行列車に乗った。目が覚めたら、名古屋城の金の鯨が朝日に輝いてい

るのが見えた。美しかったことを鮮やかに覚えて
いる。

下関から釜山までは多くの兵隊さんと一緒にな
り、腕には日の丸の腕章を縫い付けて船に乗り込
んだ。玄界灘は波が荒く、潜水艦の攻撃を恐れて
ジグザグに航海するので、時間がかかった。空に
はプロートの付いた飛行機が絶えず飛んでいて、
船を護衛していた。

朝鮮半島を縦断して夕暮れの鴨緑江を渡ると、
風景が一変した。外の気温も下がったのか、二重
窓のガラスに霜がつく。時々それをガリガリと削
り取った。荒涼とした大地を、列車は一路北に向
かっていったが、ときどき通過する駅の広場には、
電柱ぐらいの高さの円錐形の小山が幾つも見える。
聞けば、大豆を野積みにした山だという。あのた
くさんの大豆が日本に着いていれば、我が家では
豆腐屋を止めずに済んだものを、とそのとき思っ
た。

釜山からハルビンまで急行列車で約三昼夜かかっ

たように覚えている。ハル濱駅に降りた私たち信
州育ちの者でも、その寒さには驚いた。幼児の呼
吸が止まるのではないかと心配して、シヨールで
覆ってやったのだった。街には今まで見たことも
ないヨーロッパ風の建物が建ち並んでいて、夜目
にも美しかった。道路はスケートリンクのように
凍っていて、一步一步注意しながらホテルまで歩
いた。

翌日、列車で半日ぐらい揺られて成吉思汗駅に
着いた。寂しい小さな駅で、周囲には穀物の山が
幾つもあった。永和三峯開拓団まで約二時間くら
い馬車に揺られて、ようやく高遠部落に着いた。
村は収穫の最盛期だった。

学校で朝礼のとき、校長先生は内地の状況につ
いて「内地の友だちは食糧が乏しく、両親を離れ
て疎開という生活をしている。一粒でも多く内地
に送れるよう、家の手伝いをするように」と話さ
れた。学校から帰ると家畜の世話、水くみと忙し
かった。こぼした水の上に向かって乗りかかると、靴が

凍り付いて動けなくなつた。

我が家では牡馬一頭、牡牛一頭、鶏、豚を飼育して、餌やりも忙しかつた。厳しい冬が過ぎ、種蒔きが始まる少し前、若い牝馬が来た。父から「お前の馬にしてやる、面倒を見るように」と飼育を任された。このときは嬉しかつた。栗色で優しい耳をしていた。朝のブラッシング、そして餌の世話と、学校に行く前は忙しかつた。名前は「子宝号」とした。私の言うことをよく聞き、大人しかつた。一週間ばかり経つた日曜日、簡単な作業をさせてみようと、母と二人で農具を付けて畑の中へ引き入れたとき、折悪しく小石に乗り上げ、ごとんと小さな音を立てた。子宝号はそれに驚き、母と私を振り払い逃げ出し、農具はばらばらになつてしまつた。頼りの父はもう一頭の馬を使って耕作をしていて、向こうの方に行つていて見えなかつた。私は、自分の不注意による責任だと、夢中になつて逃げた馬を追いかけた。せつかく手に入れた子馬を失う我が家の損失を考えると、

諦めることはできなかつた。灌木の中や、腰まで浸かる湿地帯の中にも入つて探し回り、ズボンに裂け体の至る所から血が滲しみんだ。

中国人部落に追い込んでやつと手綱をとつたのは、午後も大分過ぎてからだつた。開拓部落で馬の背に押し上げてもらった。家までは約二十八キロメートルぐらいあるという。それほど遠くまで追いかけたのかと思ひ、びつくりした。帰る途中で山火事に遭ひ、回り道をしたりして村にたどり着いたら、夜半になつていた。村は半鐘が鳴り騒がしかつたが、それは行方知れずになつた私と馬を探すため村人を集める合図で、私が戻つたときには大勢集まつているところだつた。大変な心配をかけてしまつた。両親は集まつた人たちに平身低頭して詫びていた。私は、疲れて二、三日歩けなかつたが、子宝号はそれから私には従順になつた。

近村に、日本人からも中国人からも「ボロマン」と軽んじられていた中年の男性がいた。ぼろを着

た満人ということらしい。母がおむつにしていたボロ布を処分していたところを彼が見つけ、「譲ってくれ」と言った。「こんな悪い物はあげられない」と言つて野良着のお古を二、三枚あげたら、大変喜んで帰つて行つた。数日して、彼が先日の札だと言つて、豚肉の塊を四キログラム以上も持つて来た。「そんな心配しないで」と母は断つたのに、彼はそれを置いて帰つて行つた。

そんなことがあつてから、たびたび我が家に来るようになった。当時、中国の田舎では文盲が多かつたが、彼は達筆で立派な文字を書いていた。私は彼を軽んじる気持ちにはなれなかつた。彼は私の中国語の先生となり、私の質問に答えては所構わず土の上に字を書き、発音を教えてくれた。そのお陰で、私の中国語は急速に上達した。これが敗戦後、糧を得るための大きな力になるとは夢にも思わなかつた。

ソ連軍の侵攻と同時に、父にも召集令状がきた。牛一頭は他家に預け、馬二頭で除草などをして、

耕作地を守るため必死になつて頑張つた。もう学校には行けなかつた。

私はそれまで、神国日本は絶対に負けないと教わり、現実には耳に入つてくるのは連戦連勝のニュースばかりだったが、そのうちいつとはなしに、内地からの新聞には転戦という文字が出るようになってきた。だが、私にはその意味が解せなかつた。

八月の九日昼間、遠くの方から地響きのような遠雷のような、なんとも例えようもない音が聞こえてきたので、何事かと高遠部落の上の尾根まで上がつてみた。川のはるか向こうの尾根の辺りを、札蘭屯方面から齊齊哈爾へ向かつて黄色い砂ぼこりを巻上げて、芥子粒かいしりゅうのように見える戦車らしい影が走つていくのが見えた。日本軍の戦車だろうと、安心した気持ちで山から下りた。しかし家に戻ると、家では引揚げ命令が出たと困惑していた。戦況が耳に入らず、戦場の近くにいると思うと全身の震えが止まらなかつた。

ソ連軍の侵攻で部落の成人男性は全員召集されて、男性で残ったのは、小学生の私と二つ年上の高等科の人、それに年輩の人が数人だった。これだけの男性でこの部落の女、子供を守らねばならないと思うと、身が引き締まる思いがした。この夜以来、生意気にも祖父や母に命令調で話すようになってしまった。

祖父に錆の出た脇差しを腰に差ししてもらったが、そのとき祖父の膝が少し震えていたのを覚えていた。母には持ち出す物は味噌、塩、米、弟の粉ミルク、防寒着、あとは毛布くらいと少しでも軽くした方が良いと言い、私が家を出たら錠を下ろすよう言った。私は、二頭の馬にもいつもより麦を多く食べさせた。外は雲が多く、漆を流したような漆黒の夜だった。高等科のKさんと夜警についていた。腰には習い始めたばかりの木剣を差し込み、手には鎌を持って震えながら後からついて行った。奥歯が鳴って噛み合わせられなかった。Kさんは落ち着いていて、頼り甲斐のある大人に見えた。

押し黙って、闇を透かすようにして歩いていた。そのとき突然に「助けて！」と女の悲鳴。「待てっ！」と言う男の声。それに続いて「バーン」と銃声が一発。一瞬足が動かなくなった。Kさんに促されて、脱兎のごとく銃声のした方に向かって駆け出した。それは、女一人になった家に物盗りが入ったらしい。

翌朝、避難が開始された。夜の明け切らぬうちから馬車に荷物の積み込みを始めたが、朝日が昇り始めるころに、ようやく出発の準備ができた。そのとき、目の前で馬車の横に取り付けておいたスコップを盗み、逃げ出した満人を見つけた。「返せ」と言うと、「俺のだ」と平気そうそぶくではないか。子供だと思つて舐めているなと思ひ、飛び上がり上段から木剣を振り下ろした。額が割れて血が流れた。生まれて初めて、敵意を持って他人を傷つけた。そのうちに、右手に鎌や棒を、左手に南京袋を持って目をぎらつかせた満人がぞろぞろと集まって来て、家の周りの略奪が始まった。

危険を感じて、祖父には抜刀して馬車の上に立つてもらった。「近づく者は構わぬからたたき切つて」と言った。このとき母がいけないことに気付いた。窓から中を覗くと、弟を背負つたままの姿で晴着や花嫁衣裳を前に涙ぐんでいるではないか。大声で外から「早く捨てて！」と怒鳴った。戸口は満人に塞がれ、獲物を狙う狼のような目がその晴着に注がれている。私の声に我に返つた母は目に涙をいっぱい溜めて、手にした晴着を彼らの頭越しに一抱え投げた。そのとたんに、ものすごい奪い合いと同士討ちが始まった。

私も背後から何人かたたき出した。すぐに母を馬車の上に押し上げ、馬の尻に鞭を当てた。二、三十メートル離れたとき、屋根から降りない猫が「ぎゃー、ぎゃー」と鳴くので振り返ると、ポロマンが、我が家の物陰からこちらに向かつて深々と頭を下げ、今にも泣き出しそうな顔で見つめていた。一瞬ではあつたが、目礼を交わした。あのポロマンが見送りに来てくれたのだ。彼の手には、

鎌も南京袋も無かった。いつまでも穏やかなポロマンでいたろうか。一生忘れられない眼差しだった。二頭仕立ての我が馬車はよく走つた。その後、みすず部落に全員集結した。既に何人か犠牲者が出たという話が入ってきた。

家を出て成吉思汗の街を背にしたときに、駅の屋上から一斉射撃を受けたが、そのときでも未熟な私の手綱さばきで、あの泥んこ道をよく走り切つてくれた。祖父と母は、車上の荷物の陰で弾丸を避けていた。町が見えなくなつたころ、今度は匪賊に襲われて略奪が起きた。私も薙刀のような大鎌で危うく首を落とされそうになつた。転げ落ちて難は避けられたが、馬車は匪賊に盗られてしまった。振り返りながら「ヒヒン！ ヒヒン！」と鳴っていた子宝号の悲しげな声は、今でも忘れられない。馬車に飛び乗つて、一番上にあつた使いかけのミルクの缶を取り落とすのが精いっぱいであつた。ここで、我が家のすべての荷物は失つてしまった。

幾つか丘を越えた向こうに村が見えてきたが、

そこでも手に手に棒や鎌を持って待ち構えている人影が見えた。しかし道は一つ。そのときは、母が私と祖父のそばに寄って来て、幾らかの小銭を渡してくれた。「それをポケットに別々に入れておき、危なくなったら一つずつ離れた所へ投げてやれ」と言った。案の定、鎌を持った男が周りを振り払いながら突き抜けて襲って来た。私はその男の顔目がけて小銭を投げつけたら、母の言ったとおり、投げた小銭の取り合いが始まった。その間に必死になって逃げた。着ている物を剥ぎ取られている人、殴られて顔を腫らしている人もいた。母の機転のお陰で、なんとかその場を切り抜けたが、日が暮れると飲まず食わずの逃亡で、体が綿のように疲れてしまい、その場で小休止した。

水もなく玉蜀黍の茎を噛み、汁をすすっただけだった。弟には母が唾で湿らせた指に粉ミルクを付け舐めさせるより仕方がなかった。そんなとき、「狼だ！」とだれかが叫んだ。一度に恐怖と緊張

が走り、「だれか火を持ってないか！」と叫ぶ人、確かに何者かが走り回っている。「匪賊に発見されるからよせ！」と叫ぶ人、ちり紙か何かに火をつけて振り回したところ、静かになった。しかし間もなく、夜目にも光る槍を持った一団に囲まれてしまった。彼らは中国語ではなかった。片言の日本語で「金を出せ！」とどなったが、それ以外は明らかに朝鮮語で話していた。小さいころ、朝鮮人の友だちがいたので、朝鮮語は少し分かった。分かっただけに余計悲しかった。一人一人のポケットに手を入れて取っていた。例の小銭も取られた。槍の柄で突かれもした。子供を下ろさせて道端に転がされた。泣き出すと、「静かにしろ」と言った。

飲まず食わずの徒歩、ただでさえ乳の出の悪かった母は、何も食べないのでさらに悪くなり、弟がむずかかって困った。母は道の両側に青々と実った玉蜀黍をとって来て、柔らかな粒を手ぬぐいの端に包み、手で揉み潰し、出てきた真っ白い汁を

手ぬぐいの端を三角にして受け、それを弟の口に当てて舐めさせた。弟はうまそうに「チュー、チュー」と音を立てて吸った。周りにいた母親たちも、皆それを真似て玉蜀黍の乳を飲ませた。

略奪で荒れ放題になった部落で仮泊した。馬糞の臭いの籠もる小屋の中で目が覚めた。すぐそばに、弾丸で穴があいた袋から馬糧用の岩塩がこぼれているのを見つけ、土混じりであるが両方のポケットにいっぱい詰め込んだ。そのとき、ふとだれに教わったか忘れたが、「人間は水と塩があれば相当長く生きられる」という言葉が脳裏をかすめた。付着した土は唾液で流して吐き捨て、結晶をしゃぶった。泥水でも何でも飲んだ。こんな裸同然の女、子供の集団に、ソ連兵は武装解除を名目に銃口を突き付け手を挙げさせ、その間に時計、万年筆、櫛、現金など奪える物はすべて奪い尽くした。

その中に、流暢な日本語を話すソ連兵がいた。勇気のある老人が「なぜ非戦闘員の女、子供にこ

んなひどいことをするのか？」と詰め寄ったら、「ニチロセンソウ、アダウチ、シカタナイネ」と答えた。仇討ちという言葉が外国人の口から出たのには驚いた。無抵抗の我々に、機銃掃射を浴びせる戦車もあった。皆地べたに這いつくばって弾を避けた。頭の上では玉蜀黍が「ビシビシ」と音を立てて折れた。祖父や母のことが心配になり透かして見ると、弟を胸の下にかばっている母の体が畝の上に出ているので心配した。ソ連兵はどんな所でも平気で女に手を出すので、我々の一団は列の中に女性を取り囲んで行動した。女の命とも言われる黒髪を切つて、男の姿になっていた。あの戦車のキャタピラの音、そして「シュツ！ キューン！」という機銃掃射の弾が身をかすめるとき、きの恐ろしい音、さらに強烈な火薬の臭い、七十七歳過ぎた今になつても夢の中でうなされ、びっくりして目を覚ますこともある。家内が生きていたときは、あまりにもうなされているからと起こしてくれて、「汗びっしょりで震えていた」と言われ

たこともあった。夏の楽しい花火も、近くで見るとはいやだ。音も臭いもあのとときと同じだったから。

略奪に次ぐ略奪、あの悔しさ無念さは忘れられなかった。這うようにして斎斎哈爾の街に入った。成吉思汗の町を出てから、一週間は経っていたと思う。そこで、初めて日本の無条件降伏を知らされた。信じたくなかった。武装解除された日本兵の一団が、馬に乗り自動小銃を肩に掛けたソ連兵に、追い立てられるようにして私たちと反対方向に歩かされているのと同様だった。私たちの姿を見て、「頑張れよー」と声を掛けてキャラメルを投げてくれた。あの人たちのうち、何人がシベリアから帰国できただろうか。今でも思い出す。中国人の群衆は、サイレンと罵声と石の飛礫を我々に浴びせていた。蔣介石総統が中国国民に対して「以德報怨（徳を以て怨みに報いよ）」と諭したそうだが、この言葉は広大な国の民には伝わらなかったようだ。最初の收容所は営林署跡とかで、講堂の

ような広い所だった。ときどきソ連兵が来て、取り調べと言っては相変わらず女性の櫛などを略奪していった。

九月の初めに別の收容所に移った。料亭の跡だったが中は半分壊されていたので、住めるように直した。四畳半に三世帯十一人。赤ちゃんを潰さないように努めなければならなかった。栄養状態の悪い所に麻疹が大流行、ここまで逃げ延びたのに、弟の吉春は秋風に吹かれる枯れ葉のように、はかなく逝ってしまった。

その日は九月二十三日だった。泣いている母の姿を見たとき、私が泣いてはいけなないと心に決めた。戒厳令が夜間だけとなり、昼間は外出できるようになった。母は「祖父さんが可哀想だ！」が口癖だった。母と二人でなんとか稼いで、祖父の体に良いものを食べさせたいと思った。元手のお金は、吉春のオムツカバーに守られて少し残っていた。そのお金を元手に私が通訳して仕入れができた。初めはお菓子を売った。まだ不安な世情

だったので、日本人目当てに一軒一軒扉をたたいて売り歩いたが、大変だった。売れた日は早く帰れたが、売れ残った日は一つでも多く売ろうと街角に立つなど、苦勞した。厳しい寒さと治安の悪さで、日本人は極力外出を控えていたので、そのお陰で売れたのだと思う。地理不案内、初めての仕事、困惑することばかりであった。

そんな折、たまたま新潟県出身の丸山国雄、ふみ夫妻に出会った。二人とも商売熱心で、真っ黒に日焼けしていた。丸山さんは斉斉哈爾在住であったのでいろいろ詳しく、仕入れや菓子のような売れ残りの損失がないものを教えてもらい、乾物、石鹼、タバコ、何でも売り歩いた。ときにはお菓子を注文してくれる顔なじみもできた。二人で稼いで、祖父に小遣いをあげられるようになった。

祖父は日本人の行けない所まで行ってきた話をした。どうやってあの厳しい警戒の中を通れたのかと聞くと、「聾啞者になったのだ」と笑っていたが、母の目の届かぬ所で大好物の肉や油物を取り

過ぎたのか、腸を壊し昭和二十一年一月二十九日、六十九歳の生涯を斉斉哈爾の地で終えた。

斉斉哈爾に着いたときは、ソ連軍が占領軍で、保安隊という中国人による警察があった。なお国府軍という軍隊もあった。斉斉哈爾のソ連軍の引揚げが始まった。主な街角にはバリケードが築かれた。周囲には八路軍が迫っていた。ゆつたりと、空から偵察機が写真を撮っているのが分かった。一夜の砲撃戦で、警察本部は正確な着弾で破壊された。

国府軍に比べ八路軍の規律は良く、日本人、中国人の差別なく悪人は人民裁判にかけ、公園の裏で銃殺されていた。そして、治安はぐつと良くなった。

タバコの仕入れは自分でやった。専売制ではないので、様々の品から一口ずつ吸い分けて判断して仕入れた。子供のときからこんな経験をしたのに、私は生涯タバコは吸わなかった。

「たばこ、たばこ」と売っていた私の前に、一

台の小型戦車が止まった。灰色に塗られたペンキの下に日の丸が見えた。その戦車長が降りて来て、タバコを買ってくれた。代金をくれながら、中国語で「お前中国人か？」と私の顔を覗き込んで言った。日本語で「日本人です」と答えると、「日本はどこだね」と言われたので「長野県」と答えようと思ったが、相手を確かめようと「信州です」と答えると、急に笑顔になり「俺も信州だ、信州どこだね」「高遠です」と言うと、「懐かしいな、俺はミノワ……」と言いかけて口をつぐんでしまった。後日会う約束をして別れた。

約束の日には、朝から収容所の前で待った。当時の八路军の服は質素な灰色で、これを着られる人は上級の人だった。この青年は、きりつとしてこの服を着ていた。彼は「満蒙開拓青年義勇軍として渡満、敗戦のときソ連兵に『俺たちは兵隊ではない』といくら言っても分かってもらえず、荷物列車に押し込まれてしまった。シベリアに連れて行かれてはたまらないと、国境近くで一斉に飛

び降りた。屋根に機関銃が据えてあって乱射され、足の痛みで気絶。気がついたら中国人に助けられていた。後から飛び降りた友は、私の弾除けになり死んでしまった」と、ぼつぼつと話してくれた。平成の世なら高校二、三年の若さだ。まだ少年のような初々しさがあつた。

故郷の言葉で「そうざら」「そうだに」を連発。「五兵衛餅」が好きだ。「クルミ餅」が好きだなど、思う存分語った。「この収容所の人はほとんど伊那谷の人だから一緒に帰りましょうよ」と言うと「俺は一度死んだ人間。助けてくれた中国人に恩返しをしたい。それに、伊那谷を発つとき親兄弟と水杯をしてきた。今日は思いがけず故郷の人に会えて嬉しかった。」と言ったが、私が母に会ってくれと呼びに行っている間に消えてしまった。彼は大きなトラクターの扱いに慣れていたので、戦車長として操縦や修理技術を教えていると言っていた。

私がぼんやりと収容所の隅で考えごとをしてい

たとき、担任の先生と偶然に会った。「頑張れよ！
じっと耐えるのだよ。この世が始まって以来、止
まなかった雨はないのだよ」と静かに励ましてく
れた。私はこの言葉は今でも人生訓としている。

春の訪れと共に、收容所の中で経験したことのない病気が流行した。栄養状態が悪くなっているところへ高熱が続き、幼い子や老人が倒れた。先生も初老の方であった。日本人墓地まで数キロメートルあったように思うが、埋葬の手伝いの男手として小学生の私も頼られていた。

その病気で私が発病すると、母は不眠不休で看病してくれた。たまたまソ連兵の毒牙から逃れて、收容所に二人の看護婦さんが来てくれた。医療器具も薬もなく、ただ二人が逃げるとき持っていた注射器が何本かあるだけのようだった。後で聞いた話では、自決用のものだったそうだ。革ベルトか何かで針を研いでいたようだが、針を刺されたときの痛さは耐え難いものだった。

この病は「発疹チフスではなかるうか」と言わ

れた。媒介は虱だそうで、発病前、母の帯の間に分厚い帯芯となった日本の兌換紙幣があったが、私の薬代となって消えていった。中国人は敗戦のどさくさで日本人から略奪、隠匿した日本製の薬を、足元を見て高値で売りつけていた。

私が病んでいるのを丸山さんが聞きつけて、見舞いに来た。初物と思われる西瓜を持って来て、「元気を出せ。食べなければ病気に負けるぞ。元気になって一緒に内地に帰ろう」と励まされた。

この西瓜の甘さ、美味しさは今までに味わったことがなかった。これをきっかけに食欲が出て、起き上がることができるようになった。その姿に安心してか、看病疲れも重なった母が倒れてしまった。薬を買う金も底を突いていて、ただ手ぬぐいで頭を冷やすより仕方がなかった。動けなくなり、下の世話をするようになった。私の親だから当然のことと思っただが、母はそれを悲しがったままこの世を去った。享年四十二歳。昭和二十一年八月二十三日、引揚げの知らせが届く一週間前であっ

た。

あまりの落胆で涙も出ず、茫然自失、町の中をさまよい歩いて収容所の近くに帰って来た。街角にひとだかりがしていたので覗き込むと、壁に貼られた米軍機の残骸写真だった。当時中国では、一般には文盲が多かった。私が通った高遠小学校当時の担任の先生は、「新聞をよく読むように」と口癖のように言われ、「分からない文字は教えるから覚えるように」とも言われた。漢字にはほとんどルビが振ってあり、意味が分かった。当時の中国満州は漢字が共通であったので、渡満当時は筆談で十分間に合った。しかし、共通していない部分もあった。アメリカのことを日本では米国と書くが、中国では美国と書く。そばの中国人に意味が分からないと言われた。美国を何と発音するか分からないので、「アメリカ」で通し、大袈裟なゼスチャーで両手を広げ爆撃機を表し、それを八路军軍の対空火砲で落とすのだと説明した。皆納得した。人垣を分けて帰ろうとしたとき、その中

の八路军軍の兵士に引き止められ、矢継ぎ早に質問を受けた。「読み書きできるのか」じつと顔を見つめ「日本人か、どこの収容所か、家族はいるか、年齢は？」と問われ、そして八路军軍に入らないかと誘われた。どんな仕事をするのか聞いてみた。

近くに製塩工場があり、その製品を運ぶときの警護で、ピストルを持って荷馬車の上で見張ってくれば良い、という軽作業だった。当時、精製塩は貴重品だと聞いていた。「一晩考えさせてくれ」と別れた。このとき私は、母の死で絶望に近かった。日本の様子も分からず、このまま中国人になろうかとも考えていた。腹巻きの中には、油紙に包んだ家族三人の遺髪があった。信州高遠の蓮花寺の土に葬ってあげたい。帰国の目途の立たない今は、とてつもない大きな夢であった。一晩中どうしようかと子供なりに悩んだ。故郷の景色、祖母、親戚の人々、励ましてくれた先生、お世話になった数々の人々の顔が浮かんだ。一晩中考え夜が明けたとき、八路军軍に入るのは止める決心をし

た。朝、收容所前に昨日の兵士が、ソ連製と思われる大型のピストルをぶら下げて現れた。彼には、訳を言つて丁重にお断りした。それから氣を付けてみると、肩に掛けた古い日本軍の銃の下端が地面を引きずりそうな少年兵を、ときどき見かけた。

母の死から間もなく、引揚げの知らせがきた。

何ということだと不運を嘆いたが、帰国の道中であつたら土に葬ることすらできなかったから、日本人墓地に葬ることができたのがせめてもの慰めだった。何日かかるか分からない旅の支度をしなければならなかった。食糧をどうするか、大人の人に聞けば乾パンなどを持つより仕方がないと言われた。粉を買う金もない。それを焼くフライパンもない。元氣なとき、歩いて帰らねばと丈夫な軍靴の新品に近いものを持つていた。その靴を小麦粉に換えるのが大変だった。こちらの足元を見られ、散々たたかれた。それでも粉が手に入った。焼く道具はどうしよう。目を皿のようにして町の中を歩いた。ブリキの空き缶を見つけて、それを

平らにした。燃えるものは何でも拾つて歩いた。煉瓦をコの字に置いて釜戸を作った。少ない水で固く練つて、せんべい状にして焼いた。水筒は軍用の中古。水が多く入るので、それを選んだ。

無蓋貨車に乗せられて斉斉哈爾駅を出た。八路軍の兵士が拍手で送つてくれた。街が地平線から消えるころ、涙が止めどなく流れた。

八路、国府両軍は、松花江を挟んで対峙していた。鉄橋が破壊されていた。炎天下何時間も歩いてから、船で渡された。またしばらく歩いて、草原で列車を待った。松花江からはどのぐらいかかったか、奉天（瀋陽）の広い操車場に着いた。南に向かつて左の方に、我々より先着の引揚列車が何本も待機していた。自分で焼いた乾パンの表面に薄くカビが見えたが、手でぬぐつて口に入れた。駅に着くと、飲料水の補充が何よりも先だ。操車場の中央に水道があり、蛇口の所に列ができた。子供を背負った人とすれ違つた。双方から「あつ」と声をあげ、「良かったね」と言つた。丸山ふみ小

母さんだった。内地の連絡先を教え合った。私には書く紙さえなく、小母さんに書いてもらったメモを、家族の遺髪と共にすっかり体にくくりつけた。これが縁で、内地に帰ってからも文通は続き、何度も励まされた。

奉天から何時間くらい南に走ったろうか。はるか遠くに美しい姿の塔が見える所で貨車から降ろされた。錦県という部落、兵舎の跡らしい収容所に着いた。土間にアンペラ（粗末なゴザ）を敷き、船を待つ間に検疫と防疫が行われた。日本から医師と消毒班が来ていた。頭から体中、下着の中までDDTの粉で作りたての大福餅のようになった。栄養失調で私の足はむくんで、大人の足のように太くなっていった。ビタミン剤を一本注射してもらって大分楽になった。

次の日、腸チフス、パラチフス、コレラの三種混合の予防注射で高熱が出て眠れなくなり、井戸端で頭を冷やして一晚過ぎた。コレラの発生を恐れて、潜伏期間を過ぎ陰性が確定するまで待た

された。皆体力の限界に近かったと思う。このころ、同級生Y子さんのお父さんが亡くなられたことを聞かされた。船に乗れば日本は目の前だというのに、Y子さんの家族の嘆きは察するに余りあった。お母さんは気丈で気持ちの温かい方だったが、自分の子供の他に両親を亡くした就学前の幼い子供を三人も連れて、この厳しい引揚げの途についていた。私に会うと一声掛けて下さり、凍えるような私の心を温かくしてくれた。

葫蘆島に着いたときはさすがに嬉しかったが、家族の骨を残しての乗船は、後ろ髪を引かれる思いであった。タラップを登るときは、むくんだ足を手で持ち上げた。船名は「サムエルコート」といったような記憶があるが、大分くたびれたアメリカの貨物船だった。二夜が過ぎて、「陸が見える！」の声で甲板に出た。はつきり見え出した松の緑の美しさは、例えようもなく嬉しかった。はげ山ばかり目にしていたので、緑が目にも染みた。我々の船を見つけた小さな漁船の漁師が、手を振

ってくれた。エンジンルームの横に、ペンキで描いた小さな日の丸を見たとき、日本はまだ生きている、そんな喜びが湧いてきた。

博多港外に投錨、それから伝染病の潜伏期間が過ぎるまで、再び空腹との戦いだった。私の足はますますむくんできた。どこにも行き場のない船の中で、米の盗難事件が発生した。探し出されてすぐ分かった。母子で生の米をかじっていたという。そんなとき、私を探している人がいると言われて甲板に出た。収容所で向かいの部屋にいた兵隊さんの一人、静岡県芝富村出身の渡辺さんだった。ソ連軍は、シベリアに連れて行っても役に立たない病人、一見普通に見えても体内弾などが残っているような兵隊は、体よく現地除隊として追い出したそうだが、渡辺さんはそうしたグループの一人で、私たちの収容所に来たのだった。体力のある若者として炊事係となったので、忙しくて今まで探せなかったとのことで、夕食後再会した。渡辺さんはお焦げの握り飯を持って来てくれた。

自分もお腹がすぐだろうに、渡された握り飯をむさぼるように食べた。焦げたご飯に塩味があつて美味しかった。情けの味を涙と共に呑み込んだ。

待ちに待った上陸、広場に持ち物を広げて検閲を受けた。初めて見るアメリカ兵、左手には口紅を真っ赤に塗った日本の女性がしがみついていた。アメリカ兵は、母の形見の数珠に目を付けた。この数珠は、あの激しいソ連兵の略奪をも逃れたもので、針、針受けと一緒に木曾御嶽山の行者から授かった母の持ち物だった。それを取り上げようとしている。しがみついていた女性が眉にしわを寄せて、汚いものには触るなというような仕草をした。私は、その仕草が私に対する思いやりだと直感した。人は、こういう女性を「パンパン」と蔑んでいたが、私には仏に見えた。

引揚臨時列車で博多を出た。早朝広島を通った。新型特殊爆弾が落とされた、とうわさでは聞いていたが、上陸後見てきた景色とは全然違っていた。建物や樹木らしいものが見当たらなかった。人間

の力でここまで破壊できるものかと思った。大阪の焼け跡には鳥居や木が見られた。名古屋は夕方になった。満州に行くとき、朝日に輝いていた金の鯨の影も形もなかった。中央線に乗り換えのため、ホームに降りた。息を弾ませ渡辺さんが駆けつけ、「これを持って行け」と上陸時に全員に渡された乾パンだった。「私ももらった」「良いから非常用に持って行け。俺は東海道線一本、もうすぐだし、今まで見た通り日本はどうなっているかわからない。叔父さんが元気なら良いが、戦死でもしていて頼る人がいなかったら、俺の所に来い。ミカンやお茶でも作ろう。君のお母さんに、お礼も言わぬうちに亡くなってしまった」と言われて胸が熱くなった。私の手には、渡辺さんの住所のメモが握らされていた。

木曾谷を列車はあえぐように、もどかしい速度で故郷の山に向かっていった。「たつの、たつの」の声で列車から皆崩れ落ちるように降りた。辰野駅前の広場の人たちは言葉少なく、嗚咽から嵐のよ

うな慟哭に変わっていた。そんなとき、青年会か婦人会の方々が持ち寄ったのであろう、放心状態の我々に温かい味噌汁が振る舞われ、有り難かった。生き返った心持ちになった。これこそ故郷の味だと思い、感謝の涙と共に頂いた。これ以上の味はまだ味わったことがない。高遠まで、どうたどり着いたか思い出せない。

母の実家はみんな元気だった。一週間上陸が遅れていたら生きて帰れなかったと思うと、私を守ってくれた祖父や、母や弟のお陰と思ひ感謝した。叔母が「さあ！ 食べな」と言って、白く温かいご飯を出してくれたが、すぐに祖母に差し止められた。昔、飢饉のとき、急に食べた人は死んでしまったと言う。重湯から徐々に粒入りになり、そして米飯になり体力はぐんぐん回復した。元気になるって学校にも行かせてもらった。渡辺さんからは、美しい富士山の絵葉書で励ましてもらった。

それから一、二年が経ったある日、高遠の町を先生に引率され長藤への帰り路、杖に縋って高砂

の坂を登って一息入れている老人に会った。幾晩も我が家に来て、満州行きを勧誘した役場の人だった。私はよく顔を覚えていたので、「今日はお元氣ですか？」と問うと、「どこの子だね」「相生町の豆腐屋の息子です」と答えた。私の顔をじっと見ていた老人の目に、どつと涙があふれ出し、「申しわけなかった」と言つて土下座しようとした。私は驚いて言葉を失つてしまった。いくら静かな高遠の町と言えども、同級生や周囲の人の目がある。「戦争に負けてしまったのだから」と、土下座するのを止めた。先生には一応わけを話したが、友だちとも話はせずに帰った。あの方の子の家族も私たちと同じ目に遭い、犠牲と苦悩を背負い生きていたのだ。

無い無い尽くしであったが、曲がりなりにも六、三制が発足して、昭和二十五年の春、第一期の卒業生になれた。その年の信州は春の訪れが遅かった。四月八日午後、上京のため茅野行きのバスに乗った。割に空いていた。いつもお世話になる村

の診療所の先生が、膝の上に黒い鞆を載せて乗っていた。いつもと同じあいさつを交わした。バスが杖突峠に差し掛かった。今まで薄日だった空が暗くなり、横なぐりの雪荒れになってしまった。茅野駅に着いて振り返った。山に別れを告げるころも、頂は雲に隠れていた。

上京して、金属加工の職人さんと出会った。シベリア抑留生活で大変苦労された方であることは聞いていた。この方の前では、つらかったシベリアのことは絶対触れてはならないと思った。それより数年前に遡る。信州にたどり着いて、つらい思い出は早く忘れたかった。通学に耐えられる身体になるまで、野良仕事や山仕事に就いていった。久しぶりに汗を流し、気分が晴々とした。叔父に「今、お前何と言った。外国の言葉では分からないよ」と言われた。自分では何を言ったか覚えがなく、独り言を言っていたらしい。そんな注意を何回かされ、自分なりに気になり始めた。学校に行つて、独り言や外国語が出たら何と思うだろう。

懸命に直そうと思った。そして、中国語を忘れようとう努力した。しかし頭の中はどうなっているのか、夢の中で中国語を話している。朝、目覚めるとき思い出して困惑したものだ。Nさんの仕事は、主に漁師の使う釣り針加工だ。米粒くらいから五寸釘を曲げたようなものである。五寸釘のような針を曲げる機械まで、自分で作ってしまう。私には神業に見えた。ある日、針以外の仕事が入り込んで来た。一晩中二人で知恵を出し合い、試行錯誤の末、古来から日本にある工具を加工してできた。「ハラシヨ」使うまいと思っていたロシア語が飛び出してしまった。「忘れようと思っていたのに、こんな言葉を使って申しわけありません」と詫びた。「君、ロシア語できるのか」と聞かれた。帰国以来言葉に対する悩みの経緯を話して詫びた。それ以来、昔からの友だちのように話し掛けてくれ、奥さんに都合の悪いところは、ロシア語を交えて話すようになった。

就職の難しいときであった。手に職をつけよう

と紳士服縫製の道を選んだ。師匠にはこの三年の遅れを、スバルタでも良い、一人前の職人にしてほしいとお願いした。お陰で、今でも仕事を辞めないようにと言われ頑張っている。七十三歳になった。親戚はもとより、多くの人々にお世話になり、子供のころから師に恵まれたこと、そして十年前に亡くした妻が、茶碗一つからの出発をよく支えてくれた。すべてに、ただただ感謝のみである。